

## 基本に忠実 ②

とあるマスコミの方が酪農経営について取材するも、大型農場や放牧などで著名な酪農家、あるいは TMR センターやコントラなどは記事にしやすいものの、それ以上に数多く存在している堅実な家族経営されている農場では特段目立つことはなく、農場主からも「特に何もしていない」と聞かされるので、記事にしづらいと話していました。



「健康に乳牛を飼いつつ、産乳量も確保したい」「授精した牛は、なるべくとまって欲しい」「乳房炎がでないようにコントロールしたい」「牛が喜んで食べてくれるサイレージを作りたい」「家族が明るく暮らせるためにも、安定的に経営を維持していきたい」…など酪農家には様々な目的や目標があります。

ところが不意に牛が病気になったり、妊娠でマイナスと言われたり、サイレージの嗜好性がイマイチだったり、なかなか思うとおりにことが運ばない場合も少なくありません。極めて高度に育種改良されてきた生き物（ホルスタイン牛）を養いながら、乳牛以外にも機械や草地、経営など数多くコントロールしなければならないことがあるのですから、あらゆることに対し、すべからく100点満点の管理をすることは、いかなるスーパーマンであっても不可能です。それでも多方面にわたる農場の仕事をそつなくこなし、それぞれに及第点以上を獲得し、なおかつ全体のバランスが上手くとれていると、100点ではなくても目的や目標にはかなり近づくでしょう。

別の言い方をしますと、自分が管理する資産（乳牛、圃場、施設、機械など）の価値を、不注意によって損ねないように配慮しながら、なるべく大事に活かして利潤を生みだしていくように、常日頃の地味な仕事



の積み重ねが、結果的に絶対に外すことのできない目標や目的である「経営を成立させる・安定させる」ということに結びついているようです。

資産価値を活かすため、または現場で発生する課題や問題を解決するため、獣医学や畜産学を始めとする多方面から数多くの技術や情報提供があります。もちろんこうした知識や



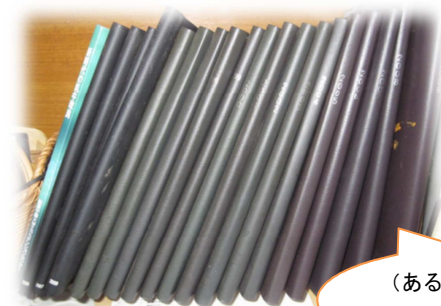
情報も大切ですが、それ以上に決して外すことができないことは『基本』です。基本から徐々にずれてしまったことによって生じた本来あるべき姿とのギャップは、小手先のテクニックで何とかしようとしても、本質的な課題解決にはつながってはこないでしょう。

基本となるようなことは、「処理室がきれいに片付いている」「乳牛は不意に人が現れても一時は気を払うけど、後は落ち着いて反芻している」「使い終わった作業機械はすぐに掃除する」…など文字にすると親父の説

教のように、あまり面白いものではありません。それよりも専門用語や数値を駆使して話しているの方が酪農に詳しくて賢そうに映りますが、現場の主役とはなりません。一部、知識ばかりが先行しすぎて、酪農家をサポートすべき立場にある半可通の技術者が先生面して“現場指導”する主客逆転もありますが、これはとんだ勘違いです。

たとえ満点や理想の状態でなくても、基本をしっかりとおさえていると、大抵のことは乳牛という生き物がその高い対応力でカバーしてくれます。特別に秀でたことはなくて

も、現場では地味で些細な仕事の積み重ねにこそ、大きな価値があるのでしょう。



(ある農場の休憩室で)  
過去20年程の営農日誌

経営主のところには、いろいろな問題があがってきます。それを分析・解決し、次に打つ手を考えなければならないのですが、もつれた糸みたいになっており、大変に難しいです。それを解くには、なぜその問題が起こったのかという、原点に戻らなければなりません。すると、どういふ変遷をたどって問題化したのかがよく分かります。問題化する以前の状態というのは、案外単純なものです。その単純な状態をベースにして、解決を図るのです。やさしいことを複雑に考える人が多いのです。

稲盛和夫

